甚兵衛じいさんとキツネ

大子町

むかし、上岡（うわおか）（現在の大子町）の山小屋に、甚兵衛という年寄りのきこりがひとりで住んでいました。山に入っては雑木を切り、薪にしては里に降りて、お金や米や味噌にするという慎ましい生活をしていました。

ある日、おじいさんが山で仕事をしていると、ひょっこりキツネが現れ、脱いであったおじいさんの仕事着の下にもぐりこみました。

不思議に思っていると、今度は鉄砲を持った猟師たちがやって来て「じいさん、こっちにキツネが逃げてこなかったか？」と聞くのです。おじいさんは、とっさに、

「ああ、そのキツネならあっちへ行ったよ」と向こう山を指して答えました。そして、猟師たちの姿が見えなくなると、

「ほら、早いこと逃げろ」と、そっとキツネを逃がしてあげました。

それから数年、おじいさんも年には勝てず、病気で寝込んでしまいました。おじいさんには、子どももなく、山に住んでいることもあり見舞いに来る人もいません。

山小屋で一人臥せっていると、ある日、若い娘が現れ、

「わたしに看病させてください」というのです。娘は、朝早くから夜遅くまで一生懸命看病しました。

「世話をかけてすまんのう」と、おじいさんがいうと、娘は

「私は、おじいさんに命を助けてもらったものです。こんな事しかできず申し訳ありません」というのです。

しばらく、おじいさんを見かけないので心配した里の人が様子を見にいくと、甲斐甲斐しくおじいさんの世話をしている若い娘の姿がありました。

しかし、娘の必死の看病のかいもなく、おじいさんは

「どこのだれだか思い出せないが、こんな老いぼれきこりにすまないなぁ」と言いながら息を引き取りました。

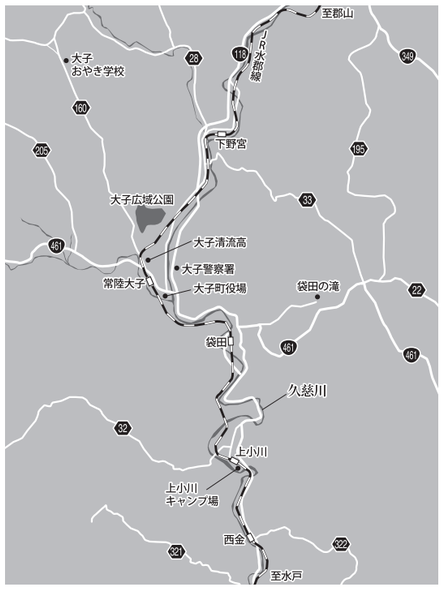
それを聞いた里の人たちは、甚兵衛じいさんの亡骸を山の中腹に手厚く葬りました。それから娘の姿が見えなくなりました。

「ところで、じいさんの世話をしていた娘は、いったい誰だったんだろうか」と里の人たちは不思議がりました。おじいさんが、キツネを助けたことがあるという話を知っていた者は

「そのキツネがじいさんに恩返しをしたのかもしれんな。生き物は恩を忘れないのか、えらいもんだ」と感心しました。

それから年月が経ち、いつしかその山は甚兵衛山と呼ばれるようになり、このあたりでは、「甚兵衛山のキツネのように、世話になった人には恩返しをするものだ」と言い伝えられるようになったということです。

〈参考文献〉『読みがたり茨城のむかし話』（茨城民族学会編著）



「運ぶ」を支え、地域社会を笑顔にする
ISUZU 茨城いすゞ自動車株式会社
本社／〒310-0063 水戸市五軒町1-2-5 ☎029-225-1215（大代） https://www.ibaraki-isuzu.co.jp